甲斐の金山から　平成10年11月30日　第6号

資料館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山

甲斐黄金村●湯之奥金山資料館報

黒川千軒の鉱山町跡を見学する参加者

鶏冠山遠景

塩山市・黒川金山遺跡現地見学会開催

11月14日、塩山市教育委員会の協力のもと、黒川金山遺跡現地見学会が開催されました。

黒川金山遺跡は、湯之奥金山（中山金山）遺跡とともに、平成9年9月2日付けで「甲斐金山遺跡」として国の史跡に指定されているもので、多摩川源流部に位置する鶏冠山東面一帯に展開する、県下最大規模を誇る金山遺跡です。

塩山市中央公民館において出土資料を見せていただいた後、梅ノ木林道終点から遺跡に向け出発。

一字一石経塚のある寺屋敷跡も見学しながら、歩くこと2時間で遺跡に到着し、昼食の後、塩山市教育委員会の飯島　泉文化財主事の案内により、テラス、坑口、作業場跡、居住地域、墓地などを見て回りました。（本文4ページ）

金山研究は、いま

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館 館長　谷　口　一　夫

わが国における金山研究は、これまで文献史学や鉱山技術史の研究領域にあり、その中で研究が発展してきました。なかでも武田氏が関係した金山についての研究は完結したかの感がありましたが、近年、文献史学者によって従来の研究に対する資料の見直しが始まっています。特に資料に使われた文献、それはいろいろな形で残されている文字資料ですが、果たしてその文書が正しく事実を伝えているのかどうか？その資料の見直し作業、またその記述内容から、果たしてこれまで語られてきた歴史が、事実そのとおり読み取ることができるのか？という疑問が出てきたわけです。

一方、こうした文献史学中心だった金山研究の世界に、大きな転機が訪れました。それは、文献の世界の金山研究に考古学が参入し、金山遺跡そのものにメスを入れたことです。さらに、その金山遺跡を中心に民俗学的事象がどれくらい残されているかなど民俗学も参入、さらには金山遺跡に残されている数々の金採掘跡の形状から、当時の鉱山技術のレベル、金鉱石の品位の問題など鉱山技術からも参入し鉱山遺跡研究は、いま、大きく変貌してきました。

以上の諸学が、一つのテーマを設定して取り組む「学際的研究」については、既に「館だより」でお伝えしてきましたが、その総合学術調査が日本において、偶然にも山梨県における特徴的な2金山遺跡で継続的に行われ、その成果がいま、日本の金銀鉱山遺跡調査の先駆的役割を担いつつあります。

平成元年・中山金山調査

本県の2金山遺跡とは、昭和61年（1986）から調査が始まった塩山市・黒川金山遺跡と、平成元年（1989）から調査が始まった下部町・湯之奥中山金山遺跡です。いずれも1年間の予備調査の後、3箇年にわたる発掘を中心とする総合調査が実施されましたが、調査は、金山遺跡の存在、規模、領域（鉱石採掘域・粉成精錬域・居住域・墓域・その他）、時代、道具（鉱石採掘・粉成・生活・娯楽）などを特定できる遺構や遺物の確認、その背景にいる「人物」、つまり、領主と金山衆、金山衆の性格などに迫っています。しかしながら、金山遺跡研究はようやく緒についたばかりで、決して完結していません。遺跡の現場へ行くと必ず新しい発見があります。

先般、黒川金山遺跡見学会（別掲）の際も、黒川の坑道のあり方が湯之奥中山と違うことに気付きました。黒川金山遺跡の東南の一部分（B－H地点）だけですが、湯之奥中山の坑道が岩盤を堀り貫いているのに対し、黒川は柔らかい砂層（花崗岩の風化？）を掘り進むため、側壁を積んでいること（本号4ページの写真参照）。また大きな岩と岩の間の砂質化した層を掘っていること。また果敢にも、石部典生氏が黒川谷に逆行する坑道の一つに入り観察した結果、右折、右折し入口とは逆方向の谷へ向かって砂層を掘っている構造になっていたことなど、考え合わせると、この場所は山金ではなく、河岸段丘の柴金狙いの坑道の可能性もあります。

これは簡単な観察ですから、一概に結論は出せませんが、湯之奥中山においても、遺跡の現場にはまだまだ重要な事実が眠っているということです。

いま、全国では兵庫県の多田銀銅山や島根県の石見銀山などが総合調査をしていますし、佐渡相川金山では奉行所跡の発掘調査を終え、いま奉行所の復元に向け事業が始まっています。日本各地から金銀山遺跡に関する新しい情報が次から次と出てくるでしょう。湯之奥からも中山・内山・茅小屋金山の新情報を見つけ全国へ発信したいと思います。

公開講座のお知らせ

菱刈金山と歴史の中の金銀山
―湯之奥金山を考える上で―

通算回	期　　日	演　　題	講　師　名
第７回	平成10年 12月12日(土)	日本の金山の歴史と菱刈金山	九州大学 教授　井　澤　英　二
第８回	平成11年 １月16日(土)	石見銀山遺跡の調査から	島根県大田市教育委員会 主任　遠　藤　浩　巳
第９回	平成11年 ２月21日(日)	黒川金山と日本の鉱山史	東京大学 教授　今　村　啓　爾
第10回	平成11年 ３月13日(土)	佐渡金山と佐渡奉行所	新潟県相川町教育委員会 主事　斎　藤　本　恭

主　催　甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
　　下部町教育委員会
会　場　湯之奥金山資料館多目的ホール
時　間　午後２時～午後４時
受講料　無料
その他　◎　館内見学や砂金採り体験希望者には割引券を用意します。
　　◎　気象条件や講師の都合等により日程が変更される場合がありますので、その都度資料館へお問い合わせのうえ御来館ください。

昨年の第３回　公開講座

資料館友の会　会員募集

「資料館を通して学習する会」……それが金山資料館友の会です。

共に学び、自らの教養を高めるとともに、利用者の立場から資料館の活動に協力していただきます。

新たに会を組織することとしました。

多数の御入会をお持ちしています。

年会費

・個人会員	大人・大学生	1,000円
	高校生	500円
	小・中学生	300円
・家族会員		2,000円
・特別賛助会員		5,000円

入会されますと

・金山資料館常設展示・企画展示を無料で観覧できます。
・友の会主催行事に参加できます。
・資料館だより及び各種情報や行事案内が送付されます。
・資料館刊行物が１割引で購入できます。

入会方法

資料館窓口でお申し込みになるか、郵便局で所定の郵便振替用紙にてお申し込みください。

郵便振替用紙は資料館までご請求ください。

入会申込書及び会費が資料館に到着した時点で会員登録いたします。

入会手続きが終了しますと会員証を発行します。

詳細は、金山資料館までお問合せください。

特別展のお知らせ

わが国の金山研究は学際的研究の普遍化に伴い、近年急速に研究の発展が見られるようになってきましたが、まだまだその課題は山積しており、なかでも、先端技術者であった「金山衆」の存在、その身分や性格、さらには動向が注目されています。

今回、「武田領域内の諸金山」の資料をもとに、「金山衆」の姿を追い求めるため、特別展を企画しました。

テーマ　道具から見た金山衆の世界
－武田領域内の金山－

会　期　平成11年1月21日㈭～2月20日㈯

会　場　金山資料館多目的ホール

活動報告　黒川金山遺跡見学会

湯之奥／中山金山遺跡見学会は、昨年、本年と既に2回開催しましたが、今回の黒川金山遺跡見学会は、かねてからの要望に応え開催したものです。

黒川千軒と呼ばれる鉱山町跡は、大菩薩嶺の北にそびえる鶏冠山（標高1,710ｍ）の東面山腹、標高1,200ｍから1,400ｍ付近に位置し、黒川谷を埋めつくすように形成され、その規模は東西600ｍ、南北300ｍに及んでいます。

国史跡の指定範囲は、この黒川千軒や、鶏冠神社を含む70.55haの面積を有していますが、中山金山遺跡のそれは16.36haですので、その広大さを推り知ることができます。

この遺跡調査は、「黒川金山遺跡研究会」により、昭和61年から平成元年まで四次にわたり実施されたもので、テラスや坑口のほか、黒川型石臼、砥石、硯、石仏台座、茶臼、礫石経などの石製品、甕、土鈴、坏などの土器、銅銭、鉄製品などの金属製品、鉱石、鉱滓、木炭、人骨などの自然遺物がおびただしい数で出土しています。

見学会一行は、梅ノ木林道終点から高低差の少ない道を黒川千軒を目指しましたが、先の台風で橋が流されてしまい、急きょロープを張りそれ伝いに対岸に渡らなければならない箇所もありましたが、無事現地に到着しました。

途中、寺屋敷跡を見学しましたが、ここは昔時に寺院があったということに由来するそうです。

ここには、礫石に教典の文字を書いて埋納した、「一字一石経塚」が確認され、出土した経石の数は13,453点にものぼり、その名のとおり1文字しか書かれていませんが、まれに多字一石といわれ複数の文字が書かれているものもあり、埋納されている教典は「法華経」であると断定され、経石の数は法華経の総字数である6万点以上であると推定されています。

黒川千軒に入り最初に見られるテラスは、調査時点でF地点とされた場所で、人骨や炭などが出土していますが、蓋付きの鉄製の箱なども出土していることから、祀堂などの存在が推定され、また、火葬場の可能性ももっている場所です。

その後、A地点、B地点、H地点を見学し、テラスや何本かの坑口を確認しました。

調査は夏期に限定されていたため、青草の茂っている中で行われましたが、冬も近いというこの時期、調査時点では見当たらなかったという挽き臼や凹み石が、枯れ草の間から顔を出しているのがいくつか確認されました。

坑口

坑口は想像していたものとは異なり、岩盤を掘り進んでいくタイプではなく、砂地の上に石の枠を組み、入口が崩れないようにしたもので、中山金山と比較したとき、その違いは今後の考察対象にもなるような興味深いものでした。

現場に立ち、参加者もそれぞれの感想を抱き、黒川千軒の過去の繁栄を偲んでいる様子でした。

誌上博物館　－シリーズ その6－　川　金

年を経ても変わることのない金の美しい輝きは、世界中の人々の心を魅了し、それは日本においても例外ではなく、古くから珍重されてきました。

金の採取の方法は、鉱脈中に含まれた金鉱石を採掘し、粉砕道具を使って鉱石を微粉化し、単体となった「山金」を採取する方法と、鉱石の風化や浸食などによって生じた金が沢に流れ着き、砂金として存在する「川金」を採取する方法と、また、その川金が河岸段丘に堆積した砂金、それは川金とは分けて「柴金」と呼ばれているものを採取する方法との三つに分けることができます。

山金、柴金については遺跡として残されていて、その中にある遺構の状態から、当時の状況について、おおよそのことは判断できます。

川金については、遺跡・遺構は川の中ですから、当然のこと遺構は残されていませんが、幸いそれに使ったと思われる道具の数によって、当時の状態を知ることができます。

山金の採取方法は、資料館だより第2号でお知らせしましたので、今回は川金について紹介します。

日本における金の採取は、奈良時代の天平感宝元年（749年）に陸奥国小田郡（宮城県遠田郡涌谷町）の黄金迫で砂金が発見されたときに始まります。

採集された砂金900両（15kg）は、当時築造中であった奈良東大寺の大仏の鍍金に献上されたといわれています。

（当時、国守百済王敬福が黄金発見を早馬で都の聖武天皇に告げると、天皇は感激して年号を天平から天平感宝と改元し、さらに天平勝宝に改めたといわれています。）

砂金を採取する技術は、当初、川底の砂を比重選考することによって金を採りだす簡単な方法であったと思われますが、時代が進んでいくに従って、川底からの砂金採取から、河岸に堆積した土砂などからの砂金採取へと移り変わりを見せてきます。

地表面に砂金を含む赤色を帯びた礫土を見つけ出したら、その地表のすぐ下を水が流れるように、付近の川を利用したり、新たな水路を造るなどして、貯水池や砂金の流し場を築き、その流し場の少し下流には堰をいくつか造ります。

次に流し場に礫土を割り崩して川底にばらまき、その中の大きな石を取り除いた後に貯水池を開き、堰き止めていた水を勢いよく流すと、礫土はほとんど流れ出ていき、砂金の含まれている細かい土砂は、堰に溜ります。その作業を何度も繰り返し、堰内に砂金を溜めていき、溜った砂金は「ネコダ」という藁を編んだ敷物によって採取します。

まず、堰内に緩やかに水を流します。ネコダを堰内に敷き、そこに溜まった砂金の含まれている土砂を「カッチャ」（カッサ）で掬って、ネコダの上にかき集めますが、その時、ネコダが流されていかないよう足で踏んでいます。

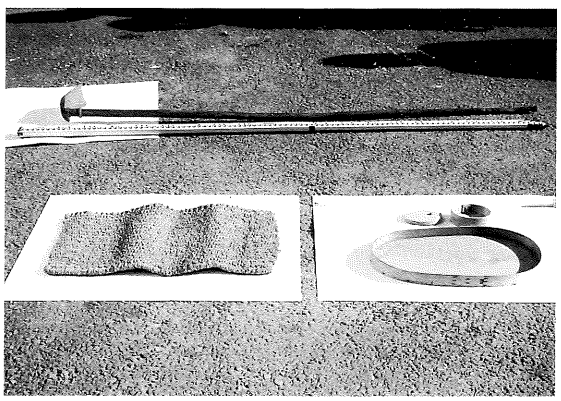
土砂は比重が軽いため、おおよそが水の流れに押し流されてしまいますが、砂金は比重が重いため、ネコダの網目に引っ掛かります。その後、ネコダからゆり板に移し換えて、水の中でゆり分けて砂金だけ採取します。

この方法で採取しても、いくらか採り残しが生じますが、この砂金も、再度ネコダによって採取されます。

まず堰内の水流を弱め、礫土を取り崩した付近に残っている砂金含みの土砂を残らず集めます。

その少し下流にネコダを何枚も並べ、両脇を石で固定しておき、水を勢いよく流すと集めた土砂は水流に押されてネコダの上を通過し、砂金を含んだ細かい砂は、ネコダに引っかかります。

引っかかった砂金は、前述したものと同様、ゆり板に移し変え、ゆり分けられます。



井川金山のカッチャ（カッサ）、ネコダ、ユリ盆、金留め

施設の御案内　－その6－

映像シアター

黄金にかける人々の夢をテーマとし、湯之奥に眠っていた黄金をめぐる様々な人の夢の広がりと、ここから戦国時代を経て日本の金山における歴史の広がり、さらには鉄砲などとの交換により、黄金が海を渡っていく物語が210インチの大スクリーン上に展開します。

スクリーンの裏面には、モニターＴＶが５台設置され、前後から迫力ある映像が映し出され、約12分の間、黄金の世界へと誘ってくれます。

映像シアター

Ｑ＆Ａコーナー

Ｑ　植物を利用した金の探鉱法があるそうですが？

Ａ　昔から、金を探すためにいろいろな方法が考えられてきました。

既に紀元１世紀ころに書かれた「博物誌」という書物には、“そこの地名によって金の埋蔵する兆候を知る”などということも記されています。

また、川下で砂金を探したり、火成岩が幾分風化して粘土化しているものを見つけたら、上流や周辺を探すというものもスタンダードな方法です。

考えられている様々な方法のなかでも、“生えている植物によって金を見極める”という方法は興味を引きます。

1,892年に発刊された「鉱山全書」（此経春也著）には、“西洋人ガ色々ノ説ヲ為セルニハ、実際ニアル種類ノ鉱物ヲ好ミテ殊更ニソノ所在ノ地ニ繁ルト云ウ”とあります。

この書が明治25年の刊行から100年以上経った今日、菱刈鉱山で実施した植物調査の結果に対しマスコミは、金鉱脈はマタタビで当たるという意味のことを報道しました。

マタタビのほかにも、金山草とも呼ばれるオシダやナナカマド、アカイタヤ等の植物の葉の金の含有量が高いということが分かりました。

これは、これからの植物には土中の極微量の金を吸い上げ濃縮する植生があるからだということですが、北海道北東部、北見地方紋別市にある鴻之舞鉱山でも、この植物による判断の有効性は高いと結論付けられました。（実際、湯之奥金山や黒川金山の現地でも金山草を目にすることができます。）

金に限らず、亜鉛はダテカンバやシラカバ林に、鉛はマンサク林に多く分布するとされ、地質学の分野でも、ある種の植物は蛇紋岩地帯や石灰岩地帯に多く分布する植生を示すとされています。

植物や自然を利用した金の探鉱法、そしてその事に気付いた人々、どれをとってみても驚かされることばかりです。

編集後記

朝夕ぐっと冷え込み、日中の風も冷たく感じるようになり、いよいよ冬が間近に迫ってきています。

資料館の周りの立寒椿の植え込みもチラホラ花を付け始めましたが、エントランスホールには、今年、もまた美しい菊の花が飾られ、訪れる人の心を和ませてくれています。寄贈者は昨年と同じく常葉宮ノ平在住の依田良平さんです。作品名は「裾野の月」。

約160輪の菊の花が形作っている半円を、月に見立てているものです。

今年も余すところ１箇月余。ますます慌ただしくなってきますが、’98年の締めくくりに向けて、もう一頑張り。そして、来年も良い年であることを念じています。年末は12月27日まで開館しています。また、新年は１月２日から開館します。

資料館だより　第６号　平成10年11月30日

発行　甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
ＴＥＬ　0556（36）0015